『境界を超えるキリスト教』明治学院大学キリスト教研究所 編，2013

万人救済説

——新井奥邃と内村鑑三を中心に——

播本　秀史
HARIMOTO Hideshi

はじめに

万人救済説はキリスト教の世界では一般的ではない。たとえば、アウグスティヌスは、世の終わりにおける神の審判について、はっきりと救われる者と救われない者とがあることを述べている[1)]。救われる者は、生前における洗礼によって、魂の復活である「第一の復活」を経験しておかねばならない。そうしてはじめて全ての人に起こる「第二の復活」において、先の魂の復活に続いて身体（霊・朽ちぬ・栄光の身体）も復活する。ここで永遠の生命を得ることとなる。一方、「第一の復活」を経験しない者は、「第二の復活」において蘇えるのだが、栄光の身体を付与されることなく、死へとひきわたされる。この死を「第二の死」と彼は言う。すなわち二度と蘇えることのない永遠の死である。このように、アウグスティヌスは明白に永遠の生命を得る救われる者と、永遠の死を得る救われない者とを区別している。

ルターにおいてもそのことは同じである。ルターも「死んだ者はみな、善人も悪人も、復活する」[2)] と言う。アウグスティヌスの「第二の復活」に相当しよう。しかし、アウグスティヌスと同じように「不信仰者にはな

んの慰めもない」[3]、不信仰者は「裁きを受け」る。彼らは神を欲しないので「悪魔をもち、いつも死に、なにもわからず、病んで、疫病にかかり、永遠に火で焼かれる」[4] と言う。ここでも、万人救済の思想ではない。

イエス自身も正しい者は「永遠の命」にあずかり、悪しき者は「永遠の罰」を受けると言う[5]。また、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」[6] とも言っている。どうも万人救済ではなさそうである。

パウロにしても預言者イザヤの言葉を引用して「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる」[7] と述べている。ここでも救われる者は万人ではなく少数者である。パウロの主想から言えば万人救済説の立場ではない。

このように万人救済説はキリスト教の正統的思想ではない。ただ西欧のキリスト教界にも、アレクサンドリア学派のオリゲネス（185頃-253頃）のように、ギリシア的教養を背景にし、彼一流の「比喩的解釈法」によって「万物の復帰」を唱える説[8] もある。

日本においても、万人救済説は正統的なものではない。キリスト教第一世代の人たちで万人救済説を唱えるのは、新井奥邃と内村鑑三くらいである。教会形成に力点をおく横浜バンドの代表格の植村正久も、もちろん万人救済説は唱えない。社会改良を旨とする熊本バンドの代表格の海老名弾正もユニテリアンの方向には向かうが、万人救済の方向には向かわなかった。ただ、筆者は万人救済説を明治20年代の新神学のひとつとしては捉えない。キリスト教の真髄にあたるものとして位置づけられるのではないか、と考える。それを、新井奥邃や内村鑑三の万人救済説を検討することによって模索する。

1　内村鑑三の万人救済説

内村の万人救済説は二つの範疇からなる。一つは十字架を中心とするものであり、もう一つは再臨の範疇にあるものである。

十字架の範疇

1902年に「万人救済の希望」[9] という短文がある。

「罪人の首たる余を救い得る愛は如何なる罪人をも救い得て尚ほ余りあるべし（中略）余は万人救済の希望を余自身の救済の上に置くなり」とある。

1908年には「戦場ヶ原に友人と語る」[10] という文章で万人救済説を展開している。ここでは「神は既にキリストを以て人類全体を救ひ給ふた」という観点に立つ万人救済が述べられている。十字架の贖罪を中心にしたものであると言えよう。

神学的に救済と赦しの概念は区別されるが、内村は赦しという概念を「救済」として用いているようである。ただ、十字架の贖罪を念頭においているので、神学的には「赦し」に該当する。それゆえ、十字架の範疇として、ここでは展開する。

1909年の「余の信仰の真髄」[11] も同じ範疇に入る。「彼〔神〕はキリストにありて既に人類全体を救い給ふた、救済は已に既成の事業である」とある。

内村の万人救済説に見られるのは、第1に自己に対する深刻な原罪意識である。すべての人が救われるのでないならば、どうして「罪人の首（かしら）」である私が救われ得ようか。「罪人の首」である私が救われているのならば、

救われていない人など1人もいない、となる。第2に十字架の贖罪によって示された神の愛である。「罪人の首」である私のために神はそのひとり子を死なせたのである。私という「罪人の首」を通して、神の愛の広大無辺なることを知るのである。これら二つ、自己の罪と十字架の贖罪に示された神の愛とが万人救済説の根拠となる。

さて、そうすると、どうしようもない罪人も神の愛によって救われている、ということになる。ルター的に言えば「罪人にして義人」、アウグスティヌス的に言えば「罪人ではあるが罪人とは見なされない者として在る」、詩編32編（ダビデ）やパウロにならえば、「罪を覆っていただいた者・咎を数えられない者・罪があると見なされない人」ということになろうか。

しかし、世の現実を見れば、十字架に示された神の愛を、神の痛みを、あざ笑うがごとき悪と罪に満ちている。すべての者が赦されている、その意味で救われているはずなのに、なのである。世の現実と内村における私の現実が矛盾するのである。

ここにきて、再臨の範疇における万人救済説が要請される。

再臨の範疇

1916年10月10日発行の『聖書の研究』195号に「普遍的救済」という文章がある。ここでは、救うに値しない罪人は「いまだかつてありしことなく、また今あることなく、また将来においてもあることなし」[10] とある。救済が既存のこととしてだけでなく、過去、現在、未来にわたって捉えられている。特に未来、「最後の救いにかかわる信証」[10] として捉えられていることに注目したい。ここから「再臨運動」はもう一歩である。再臨運動は1918（大正7）年に開始されるが、その直接の原因、引きがねとなったのは米国の親友D. C. ベルから送られてきた『日曜学校時報』（Sunday School Times）の一記事を読んだことにあった。それは、1916年8月のこと

であった。

1926年12月に「再び万人救拯説について」という論文がある。それは、再臨運動は終えたが、再臨信仰を深く宿した内村の円熟した万人救済説が展開されている。内村の死去4年前である。そこで、基底となる信仰（思想）は「愛そのものでいましたもう神が、少数救拯をもって満足したもうとはどうしても思えない」[11] にある。

ここを基底として、内村は私の現実と世の現実との矛盾に次のような思想を展開する。

神の赦し、万人救済は絶対確実な現実である。そのことを信じて疑わない。罪人の首たる私がその証である。しかし、たしかに世の現実においては実現していない。けれども、将来において、神の再臨において万人救済が実現することを信じる。そこでの救済は最終的な万人救済であって、すでに赦されたというかたちで救われていた者も、そうではないと思われる世の現実にうごめく者も、すべての者が救われるのである。私はそのような神の最終的な万人救済を信じる。神の愛とその愛が私に与えてくれた信仰とによって、私は神の万人救済を信じる。それが希望である。私は今その希望を抱いて再臨のその時に備えて神のために奉仕する。希望を抱いて、私を赦し私を愛してくれる神のために、万人救済の神の業に奉仕する。この主体の働きに、自己の現実と世の現実との矛盾を統一する鍵がある。神の万人救済はそういうものをすべて包含するものとしてある。

ところで、その主体の働き、神の救済の業への奉仕を為す時には、十字架における私の赦し、その意味での救いは一旦否定される。それは、すべての人が救われるのでなければ私の救いもない、という考えに一端吸収され消滅するのである。しかし、このいわば再臨における神ゆえ十字架の神の救い（赦し）を否定するということが、逆に真の救い（最終的救済）をもたらすものとなる。罪なき全き存在としてのイエスがわれわれの罪ゆえに自らを犠牲としたように、われわれも自らの赦しを犠牲とする（否定す

る）ことによって神の御旨に叶う者となる。内村はこのあたりの考えを示すため、パウロの次のような言葉を引用している。

「わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」（ローマ９：３）

内村において、パウロのこの言葉は、十字架の範疇だけでなく、再臨の範疇における万人救済も含めて解釈されているのではないか。再臨の神の最終的な救済の事業に参加し奉仕する主体の在り方として捉えられている、と考える。これは、「わが救われしは、わがために救われしにあらずして、人を救わんがために救われし」[12] や「『救わる』とは、自己を忘れて他を救わんと欲する状態に入ることである」[12] と述べる内村の考えに呼応する。

かの矛盾は赦された者を神の事業に参加させるため予定してあったものかもしれない。すべての人が救われないかぎり私の救いもないという救済観を有し、それゆえ神の最終的な万人救済の事業を信じ奉仕する。その主体の働き、信仰者の責任、使命、召命こそが矛盾を解く鍵であった。

内村の万人救済説は「宇宙万物悉く可なり」[13] といって去った内村の信仰の核心にあるものと思われる。

2　新井奥邃の万人救済説

新井については、神秘主義的傾向を有しているがゆえに、その方面からの論考もある。それは森有礼の小弁務使（代理公使）としての渡米（1871年）に随行し、森に紹介されたキリスト者がトマス・レイク・ハリス（Thomas Lake Harris, 1823-1908）であったからだ。ハリスはスウェーデンボルグの影響を受けた神秘主義者で新生社（The Brotherhood of the New Life）という教団を営んでいた。1875年に拠点をニューヨークからカリフォルニアに移した新生社には「葡萄王」として知られる長澤鼎もいた。そこで新井は帰国する1899年まで過ごす。在米生活、実に28年間であった。もっとも訳あってハリスが1892年にカリフォルニアを去ってニューヨークに移ってから帰国前の７年間は独居生活をしていた。ともかく、新井がハリスの影響を受けたことは明らかである。しかしながら、新井の信仰の最深部は万人救済説にある。また、その信仰は自己の罪を深く自覚した贖罪信仰である。ただ、贖罪信仰と神秘主義が「二而一」「一而二」すなわち、二にして一、一にして二という相即として捉えられている。これは、ハリスの思想の影響であるが、内実はハリスの思想を凌駕している。もともとは、神は男にて女、という意味で「一而二」「二而一」であった。それゆえ「男女神」などとも新井は表現する。しかし、この「一而二」「二而一」をキリスト教全体にまで信仰と思索を新井は深める。黄金律で言えば、律法と福音が「二而一」「一而二」となる。

新井の万人救済説は次のようにある。ここでは『奥邃広録』全５巻を中心に述べる。第１巻より第５巻（ほぼ編年体）まで、「大赦」（万人救済のこと）の言葉に満ちている。

「大終に大望あり」[14]
「救世者は至悪の悪魔と雖も之を救はざるべからず」[15]
「神は必ず審判を以て人を救ふ」[16]
「大終に於て神に復帰す」[17]
「神の審判は福事也」[18]
「夫れ訟なく審なきは、主の本旨也。訟ある、審あるは、勢也。本旨に非ざる也」[19]
「以救行全赦于不敬之罪人〔神を敬わない罪人をも全て赦し救済する、の意〕」[20]
「審判者救也〔最後の審判は救いである、の意〕」[21]

こうして見ると、万人救済説は彼の晩年に多く語られている。新井の信仰の到達点といってよいであろう。至悪の悪魔でも救われる、まさに審判は救いである。もっと言えば、審判でさえ神の本旨ではないという。審判があるのは「勢」である、という。勢とは世の現実、人間の現実から導き出される何か、審判を設定せざるを得ない人間と世の現実があるということではないかと、と考える。神の本旨は審判することではない、世の「勢」から審判を設けているが、それは救いに他ならない、と言うのである。しかし、これは究極のところを述べたもので、それによって、われわれは手放しで安心してはいけない。新井の万人救済説は峻厳であって、砂糖菓子のようなものではない。

二而一、一而二としての全赦と神法

新井は次のようにも述べている。

> 「神は人を捨てじ。神は基督を害せし者をも皆救う。神は人を捨つ。神は基督を愛せし者をも併せてこれを捨つ。けだし法の行ふ所なり」
> 「神法無仮借。不許隠匿。生死審判不可免也〔神法は仮借しない。すべてを明るみに出す。その結果、生死・永遠の栄化の身体の生か永遠の死か、の審判を免れることはできない〕」22)

「全赦」は万人救済を指す。新井も内村と同じく、赦しと救いの区別にこだわっていない。「全赦」を「大赦」という呼び方もしているが、意味するところは同じである。また、「神法」という言葉は「法」とか「定命」とか「天律」とも呼ばれている。「全赦」は愛、「神法」は義、と考える。「全赦」と「神法」とは、二而一、一而二なのである。神の義を離れて神の愛はない。

愛なる神は義なる神に仕えねばならない。義なる神も愛なる神に仕えねばならない。愛なる神は義なる神であり、義なる神は愛なる神である。全赦は神法によってなされなければならないし、神法とは全赦である。神法のない全赦は全赦ではなく、全赦でない神法は神法ではない。全赦はすなわち神法であり、神法はすなわち全赦なのである。二而一、一而二なのである。

では、それらを二而一・一而二、たらしめるものは何か。切り結ぶものは何か。「悔い改め」がそれである。新井は端的に「神の救いは厳法にあり、悔改の実を要す」23) と述べている。

神ははじめから全赦である。それが神の本旨である。未信者も、罪人も悔い改める心さえあれば救われる。それが神法である。悔い改める心がなければ救われない。それも神法である。では、元の木阿弥万事休すなのか。いやそうであるはずはない。神は悔い改めることをしない者にも悔い改める心をもつようにして下さるのである。ここに神の全能がある。神法がある。しかしてそれが全赦である。愛である。かくして神法・厳法により人は救われるのである。

信仰者にとっての全赦と神法

さて、信仰者にとって全赦と神法はどうなっているのだろうか。信仰者はすでに赦されてある者である。いわば未信仰者の到達から始まっている。もとより、全赦は初めの日より終わりの日まで全きものであり一なるものである。ただ、その人の、新井によれば「程度に応じて」、働き方、受けとめられ方が異なる。

信仰者と未信仰者の関係をマタイ伝第20章1節から16節にある話から説明する。1日1デナリというのが約束であった。朝早くから働いた者にも夕方から来た者にも等しく1デナリが支払われたが、そのぶどう園の主

人は何の約束違反もしていない。1デナリは1デナリであって、それ以上でもそれ以下でもない。ただ、人によって、「程度に応じて」、朝からか夕方からかによって、受ける印象、受けとめられ方は異なるだろう。朝早くから働く者が夕方から働く者と報酬が同じというのは、納得できないという者もいることだろう。信仰者はいわば朝早くから来て働いている者である。それゆえ夕方になって来た者より多く働かなければならない者である。それが神法である。しかも、夕方から来た者より多く受けとることもないのである。それも神法である。1日1デナリは1デナリである。朝早くから来て働いている者に対し、信仰者に対し、何の偽りも過不足もない。神の全赦もそのようなものとして在るということだ、と考える。

このたとえ話の締めくくりとして「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」という言葉がある。これこそが神命（神法）と全赦にかかわる信仰者の在り方を表す言葉ではなかろうか。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」[24] ここに信仰者の在り方がある。新井自身も「未だ世界全体が救はれないのに、特に先ず一個人又は数人のみが円満に救はれると云う事は必ず有り得べからざる理を知らねばなりません」[25] と言っている。宮澤賢治と新井奥邃とは直接的な交渉はなかったが、共鳴する精神を有しているのではないか。また、新井は「己の救ひを得んよりも、寧ろ他及び人類全体の早く救ひの道に進まん様力を尽して奉仕すべきなり」[26] とも述べている。

贖罪観との関連

先にも述べたが、新井の信仰は贖罪信仰である。人間の罪は神の子の犠牲をもって贖わなければならないほど、強烈・強大・深刻であって、とても人間の力で抗しきれるものではない。贖罪信仰にはそのような、度し難い人間、全く駄目な人間、原罪を有する人間への認識が根底にある。彼の死後、枕辺から発見された「奉禱」[27] を見れば彼の信仰の在り様は理解さ

れる。一部分を紹介する。

> 世界ノ悲慘其ノ責誠ニ予ガ身に在リ其ノ予ガ身ニ在ル責ヲ世ハ知ラズ唯我ガ父母神ノミ之ヲ知リ給フ
>
> 他人ノ罪モ亦誠ニ我ガ罪ナリ世界ノ悲涙骨髄ヲ通シテ予ガ身ニ滲參ス予ガ罪千刑萬死ニ當ル

「奉禱」は1914年に書かれていた。第一次世界大戦の最中である。世界の悲涙はそれを指す。それが新井のような人間に、どれほどの苦悩を及ぼすかは、想像に難くない。新井が亡くなるのは1922年であった。

神秘主義はイエスの贖罪を軽視する。イエスは父なる神と人間との断絶を繋ぐ存在で、イエスを通して人間は神と繋がることができる。しかし、神秘主義は神と人間の直接的な繋がりを強調し、媒介者としてのイエスを軽視ないし、無視する。その点からも、新井は神秘主義者ではない。

ただ、新井に神秘主義的傾向があると思われるのは、十字架の死を、人間への愛の証であることを強調する点にある。人間を愛し、自らを犠牲としたイエスの行為（死）を倣う者となることが、新井のキリスト教である。「基督の志願奴隷」という言葉を新井はよく口にする。贖罪と愛とはイエスにおいては一致するが、人間に人間全体への贖罪は不可能である。それは神の領域である。神の子イエスにのみ可能なことである。そこで、新井はイエスの人間への愛を倣うことを目標にするのである。新井における「イエスを倣う者」とは、他者のために自らを犠牲とすることを意味する。イエスのように自己を犠牲にしても他者を愛することで人間のそれは、十字架の死を人間の罪の贖いと見るよりも、人間への神の、したがってイエスの愛の行為とする見方が強いのである。しかし、それは人間の限界を知悉しているがゆえなのである。

また贖罪は、父なる神が子なる神イエスを、人間の罪を贖うため犠牲と

したことに力点が置かれる。そのことが父なる神の人間への愛の証でもあった。しかし、新井は独特の十字架観を有している。十字架の時、イエスは父より捨てられたと、新井は解釈する。「父是の日に於て誠に其一愛子を遺てたりしなり」[28] という。イエスはその時「嗚呼我が神よ、爾何ぞ我を遺てたるや」と言いつつ「大苦」を忍んだ。それは神への絶対的信頼があるからである。その十字架上のイエスのように、我々人間も「欲怒」を忍び、「大苦」をもって、神のために、イエスを倣い、自らの「欲怒を殲滅」しなければならないと言うのである。欲怒を絶滅させるための戦いを「神戦」と彼は呼ぶ。神のために自らと戦うのである。

神戦に勝つ時、その人は「再生」する。イエスは「大苦」を忍び、自ら奮起して復活した、というのが新井の考えである。人間も神のために欲怒を絶滅させ、すなわち旧我を死なせなければならない。旧我の我を死にきることによってはじめて、神によって自ら立つ、自ら復活する、自ら新生（再生）することができる、というのである。

ところで、イエスが自ら奮い、復活できたのは、母なる神すなわち聖霊があったからである。これは新井の父母神信仰と繋がる。人間も母なる聖霊の力によって、イエスのように「大苦」を忍び、神のために自らを新生・復活させてゆくべきと、新井は考える。聖霊の働きを母なる神の働きと捉えれば、新井の神観は三位一体の神にあると言いうるのではないか。

再臨観との関連

神・イエスの贖罪という業があったにもかかわらず、また、自らの欲怒という罪を絶滅する神戦を戦ったとしても、依然として、この世には様々な罪や悪がはびこっている。その現実から、「大終」の審判、キリストの再臨という思想（信仰）が現れる。

新井は人間に出来うることとして、自らを神に奉げ、神のために自らの欲怒を殲滅させる生を生きた。まず、自らを「新生」・「再生」させること

が、神の意に叶うことと信じ、日常生活を律した。弟子たちにも奨励した。それが自らを犠牲としたイエスの行為を倣うことであった。しかし、一方で新井は自らの限界も知っていた。人間はイエスにはなれない。弟子たちに見せなかった新井の信仰は「奉禱」に記されている。「余ガ罪誠ニ大ナリ祈ラント欲シテ祈ルニ力ナシ」こういう思い（信仰）を宿して神戦を戦ったのである。また、「改造、人不能。神新造金物。而人新生」[28] とも述べている。人や世界を改造することは人間には不可能である。神のみが世界と人間を改造することができる。そのことによって人間も新生することができる。と述べている。

再臨思想は、大終の審判・救いは人間の力が絶望に終わるところであると共に、神の力が希望となるところを基盤として生まれる。このことは、内村にも新井にも共通している。しかも２人は最終の審判が「万人救拯」「大赦・全赦」であることも類似している。

再臨のキリストにおいて、すべての者が、悪人も罪人も傲慢な人もそれを悔い改める人と成らせられて、救われるのである。復讐の影すら、地獄の臭いすら何もない。全肯定、全悦楽、全感謝、全信仰といった明るさ、安らかさ、豊かさ、確かさに満ち溢れている。内村に感じる信仰とともにある思想の深さと壮大さを新井にも見る。

新井の章の冒頭にあげた言葉を一部ここにも記す。

「救世者は至悪の悪魔と雖も之を救はざるべからず」

「神の審判は福事也」「審判者救也」

おわりに

内村鑑三と新井奥邃のキリスト教観のうち、その核心を占めると思われる万人救済説をめぐって述べてきた。２人に共通しているのは教会から距離をとっているところである。宗教における正統とは何かの問題には、そ

もそも経典そのものに問題を含むし、教理そのもの、教会・教団という組織、また信者の受けとめ方・在り様、その国（場所）、その時代（時間）など、様々な要因があり、これを概観するだけでもたいへん困難な作業を伴う。

ここでは、キリスト教界で正統でないとされている「万人救済説」をとりあげた。たまたま、この２人は教会組織に批判的な立場に身を置いていた。教会組織の在り方が、正典そのものに、また教理の在り方に波及する可能性も無くはなかろう。一方、そういう政治学的・経済学的・社会学的要因から全く隔絶して人間や世界の真理を経典（聖書）は説いてもいる。いや、過去・現在・未来を含めた時間軸や、この世界だけでない神の場所・仏の場所、真理の場所、ひろく宇宙全体を含めた場所軸を含んで、たしかに真理が語られているように思われる。ただし、言葉で宇宙の真理が語られるか、相対的人間が宇宙の真理、神の真理を知ることができるのか、という問題は残る。「万人救済説」はどのように位置づけられるのだろうか。

ぶどう園は神の園である。キリスト者はぶどう園で働く者であり、ぶどうの木に連なる者である。ぶどう園で神のために働く者は「後の者が先になり、先の者が後になる」者である。神の救済の事業のために、自らの救いを後にして他者の救いのために働く者である。ぶどう園の主人である神は、人間をそのように造られた。イエスでその道を知らしめた。その神が万人救済でないはずはない。神の愛はぶどう園の中だけでなく、あまねく人間世界を覆う。いや実は、全世界、全宇宙がぶどう園であるのかもしれない。そう新井や内村は考えたのではないだろうか。

注

1）アウグスティヌス『神の国』(5) 服部英次郎訳、岩波文庫、1991年、「第20巻」、「第21巻」参照。
2）ルター『コリント人への手紙Ⅰ 15章講解』（『ルター著作集』第2集10）徳善義和訳、聖文舎、1988年、50頁。
3）同前書、59頁。

4）同前書、97頁。
5）マタイによる福音書25章46節。
6）同前書、22章14節。
7）ローマ人への手紙9章27節。
8）竹内寛『教理史』（上）、日本YMCA同盟出版部、1969年、126頁。
石原謙『キリスト教の源流』岩波書店、1972年、114-123頁参照。
9）『内村鑑三全集』第10巻、岩波書店、1981年、154頁。
10）『内村鑑三全集』第22巻、428頁。
11）『内村鑑三全集』第30巻、72頁。
12）上掲書、175頁。
13）鈴木範久『内村鑑三』岩波書店、1984年、201頁。
14）永島忠重編『奥邃広録』第1巻、21頁。
15）『広録』第1巻、100頁。
16）『広録』第4巻、309頁。
17）上掲書、424頁。
18）『広録』第5巻、37頁。
19）上掲書、126頁。
20）「立信記」『広録』第5巻、4頁。
21）上掲書、11頁。
22）上掲書、16頁。
23）「教訓自読」『広録』第5巻、125頁。
24）宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『校本宮澤賢治全集』第12巻（上）筑摩書房、1975年、9頁。
25）永島忠重編『奥邃先生講和集』警醒社、1936年、165頁。
26）「語録」『広録』第2巻、203頁。
27）永島忠重『新井奥邃先生』奥邃広録刊行会、1933年、168頁。「奉禱」の一部分は生前既に弟子たちに示されていた。ただし、「世に公にするものに非ず」と付言されたものであった。新井の死後、枕辺に遺書とともに発見され弟子たちはその全容を知るに至った。弟子の永島は師の命に背いてこの著書の中で公にしたことになる。しかし、永島のお陰で我々は新井をより知ることができる。弟子たちが命に背いたもうひとつの例は墓を造ったことである。新井は写真も撮らせなかった。
28）「語録」『広録』第3巻、89頁。

※追記　本拙論は拙著『新井奥邃の人と思想――人間形成論』（大明堂、1996）を土台とし、加筆・修正を加えたものである。